

厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

総括研究報告書

リプロダクティブヘルスからみた子宮内膜症等の対策に関する研究

主任研究者 武谷 雄二 東京大学医学部産科婦人科 教授

研究要旨

子宮内膜症は疼痛を主体とする、長期にわたる頑強な症状、妊孕性の低下、悪性病変への二次的変化の可能性など現在の女性の健康を脅す最も重要な疾患と言っても過言でない。しかも子宮内膜症は年々増加傾向にあり、現在本邦で診療を受けている子宮内膜症患者は12万人以上にものぼる。そこで、本研究は社会医学的にも重要性を増しつつある子宮内膜症の発症予防と有効な治療法の開発を目的として、以下の4つの課題を取り上げた。（1）子宮内膜症の診断・治療の現状と問題点を把握して適切な診断・治療指針を確立すること、特に（2）子宮内膜症合併不妊症、および（3）子宮内膜症性疼痛に対する最適な治療・管理指針を創案すること、さらに（4）子宮内膜症発症予防の観点から子宮内膜症の発生と女性のライフスタイルの関連を解明すること。いずれも全国規模の前方あるいは後方視的アンケート調査を中心とする研究であり、これらの成果を集約し、子宮内膜症の予防および子宮内膜症に対する多様かつ総合的な管理を確立することを企図した。

まず、「子宮内膜症の診療において最も適切な診断法・治療法は何か」とのリサーチクエスチョンに対して、分担研究者寺川らは平成9年10月から12月までの3ヶ月間に子宮内膜症と診断され手術あるいは薬物療法を行った167症例を前方視的に調査し、以下の成績を得た。術前に下腹痛、腰痛、性交痛および排便痛などの疼痛を有した患者のうち、術後1ヶ月、および12ヶ月の時点で疼痛が軽快したものは、各々55%、62%であり、手術によって子宮内膜症病変を完全に除去し得た患者においては術後残存病変を有する患者に比較して高い改善率を得た。また、術後薬物療法の追加には疼痛および多覚所見の改善に効果を見いだせなかった。

さらに、「子宮内膜症合併不妊患者に対する不妊治療法の開発」に焦点を絞り、分担研究者田中らは腹腔鏡で子宮内膜症の存在が確認された703例の不妊患者に対して施行された治療法と妊娠率を後方視的に解析し、以下の結果を得

た。腹腔鏡施行前後の臨床進行期(rAFS)は妊娠率に影響しなかった。術後 IVF 以外の治療を行った症例においては、腹腔鏡下手術において両側附属器周囲の癒着剥離、卵管疎通性の改善を徹底的に行うことが妊娠率の改善につながった。また、術後 IVF を施行した患者においては、腹膜病変焼灼、癒着剥離、腹腔内洗浄を十分に行うことが妊娠率向上に寄与した。しかし、術前術後の薬物療法は腹腔鏡下手術後の妊娠率の改善には寄与しなかった。

また、「子宮内膜症性疼痛の長期予後と管理法」に焦点を絞り、分担研究者星合らは、腹腔鏡または開腹手術により子宮内膜症の臨床進行期(rAFS)の情報が得られ 3 年以上の追跡調査が可能な 232 例を対象に疼痛についての予後調査を実施した。その結果、rAFS 、 、 、 期において有痛症例は各々 40.5%、67.0%、53.8%、69.0%であり、それぞれに対して手術療法あるいは薬物療法が施行されていたが、全体として術後 23%に疼痛の再発が認められ、そのうち 25%は 3 ヶ月以内に再発、47%は術後 1 年以内に再発していた。しかし、現在までの症例数では臨床進行期別あるいは治療法別の再発率には一定の傾向を掴めておらず、さらに調査を拡大して最適な管理方法を確立する必要がある。

最後に、分担研究者堤らは子宮内膜症の病因解明および予防法の確率をめざし、子宮内膜症患者および一般ボランティア総計 6221 名に対して、「ライフスタイル」に関するアンケート調査を行った。その結果、本人が母乳、人工乳、混合保育で育った各群の子宮内膜症の割合は、各々 8.1%、10.7%、12.2%であり、母乳で育った群では有意に子宮内膜症の頻度が低かった。食物の嗜好と子宮内膜症の関連について解析したところ、子宮内膜症群では魚、肉、野菜類のなかで肉類と回答したものが多く、対照群では野菜と回答したものが多かった。また、子宮内膜症では対照群と比較して初経年齢は有意に若く、妊娠・分娩・授乳回数が有意に少ないことが明らかとなった。さらに現在、今回の結果において有意な差が認められた項目を中心に子宮内膜症発症との関連性を解析するためさらに詳細な第 2 次アンケート調査を実施中である。

以上、各研究は本研究のリサーチクエスチョンに一定の回答を与え、子宮内膜症の治療および予防法の確立において有益な知見を提供するものとなった。